

人々の目に映る私とは? -- 日本人+女性+研究者であること (フィールドワーク心得帖 第9回)

著者	村上 薫
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	183
ページ	61-62
発行年	2010-12
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://doi.org/10.20561/00046291

フィールドワーク
心得帖

人々の目に映る私とは？

—日本人十女性十研究者であること

一九九六年と二〇〇七年に、トルコの大都市の不法占拠地区の住民、とりわけ女性を対象にそれぞれ一年間にわたる聞き取り調査を行った。一九九〇年代半ばのトルコでは都市の移動者社会の研究が蓄積されていたが、多くは「移動者」を描こうとしたものの実質的に家の外の男性の世界だけを描いていた。それが、私が女性に注目した理由である。最初の調査では、イズミルで零細縫製工場に働きに出た若い女工が、女性の居場所とされてきた家から出ることで新しい世界を切り開く様子を明らかにしようとした。約一〇年後、移動者のプロフィールは大きく変化し、貧困の慢性化と政府の社会扶助プログラムのはじめとする援助への依存が指摘されるようになっていた。そこで二度目の調査は、イスタンブルで援助を受けて暮らす人々が貧しさや他人から援助を受けることをどのようにつけているの

か、援助をかき集め日々の食卓を整える女性の経験を中心に明らかにしようとした。二回の調査を通じて感じたのは、私が調査で得た情報は私が誰なのか、より正しく言うと、私が人々から何者と見られているかに深く関係しているということだった。

●日本人女性研究者は得をする？

調査を始めてすぐ感じたのは、私は調査地の人々からまず日本人として、女性として、さらに研究者として扱われているということだった。そのうちいちばん効いたのは私が女性であることだろう。移動者社会では、女性は家族や親族以外の男性との接触を制限する伝統的名誉規範が守られている。だから男性研究者にとつて女性へのインタビューは難しい。イスタンブルの同じ調査地であつて調査を行ったあるトルコ人男性研究者

は、数ヶ月にわたる調査のあいだ、一般家庭に招かれたのは結局一度だけで、そのときも妻は夫と客に食事を出すと、ろくに話もせずそそくさと部屋から出てしまったという。私が二度目の訪問ではよく泊まっていけと勧められ、実際たびたび家に泊めてもらったのは対照的である。一方、研究者としての私は、教育を受けたモダンな女性と見られるから、擬似的な男性として行動することができ、男性とも問題なく話ができる。

もちろんよそ者だから、最初は用心されて、インタビュの約束をとりつけて家を訪問しても、必ず近所や家族の誰かが同席した。一方、いったん親しくなれば、普段のつきあいでは話せない話もよそ者にはかえってしやすいようで、孤独感や不倫の打ち明け話をされることもあった。そして同じよそ者でも、日本は「伝統を失わず近代化に成功した国」として良いイメージがあるから、日本人としての私はたいへん歓迎された。

日本人、女性、研究者という、人々が私につけたこれら三つの印は、調査を進めるうえで、人々へのアプローチのしやすさや、得られる情報の量という点で、だいたいにおいてプラスに影響したように思う。もちろんトル

コ語が不自由だったり、東洋人が珍しい子供たちに「チャン・チン・チョン」と囁し立てられうんざりしたり、不利なこともたくさんあったが、当初外国人であることに伴うハンディだけを予想して身構えていた私には、自分の立場が調査に有利に働くのが意外だった。

●情報の内容への影響

しかし日本人、女性、研究者という三つの印は、単により多くの人から話を聞き、より多くの情報を得る助けとなるだけではなかった。大事なものは、それは私が得る情報の内容にも影響を及ぼしたという点である。影響は、日本人の私にもわかるように説明するため、トルコ人同士で話すのとは説明のしかたが違うといった次元にとどまらない。ひとつエピソードを紹介しよう。その女性は、夫が失業し、自分も目が不自由なうえに障害児を抱えていた。彼女はある日、社会扶助を受けようと福祉事務所を訪問したが、窓口の職員から「若いのだから働け」と追い返され、申請書を受け取ってもらえなかったという。これを聞いた私は、「あなたはこんなに困っているのだから、給付を受けるのは市民として当然の権利ではないですか」と憤

専門 トルコ地域研究

2006～07年 ボアジチ大学（イスタンブル）文学部客員研究員

2007～08年 米国コロンビア大学人類学学部・女性ジェンダー研究所客員研究員

近著に“Constructing Female Subject: Narratives on Family and Life Security among the Urban Poor in Turkey”, IDE discussion paper series No.198, 2009 がある。

慨した。ところが彼女は、職員が申請を受け付けなかったことは批判しつつも、「家庭訪問に來ないのだから私が貧しいかどうか職員たちにはわからない。それなのに援助を受けるのは私の権利などとは言えない。そんなことを言えば、国家にたいして失礼だ」と答えたのである。福祉を権利とは考えていないのか？ 国家に失礼とはどういうことだろうか？ そういえば別の男性も、国立病院の治療費を免除されたことについて、「トルコ国家は偉大だ、民を見捨てない」と私に向かって力説したことがあった。彼らにとって社会福祉とは、慈愛に満ちた国家が与える恩恵なのだろうか？

私とは別の地域で社会扶助の受給者への聞き取り調査をした経験があるトルコ人研究者にこの話をしたところ、彼女はにやりと笑い、「それはあなたが外国人だから、気取ってそう言ってみたのでしょう。私たちが調査した人たちはみんな国の悪口を言ってたわよ」と言った。そしてちょっと考え、「でも、それは私たちが左派という政治的立場を明らかにして相手と接したからかもしれない」と言った。その後、調査地で何人かの人たちにこんな女性に出会ったと話をしたところ、ほぼ全員が彼女

が援助を受けるのは市民としての権利だと答え、国家にたいして失礼という感覚はあまりぴんとこないようだった。

振り返ってみると、私の前で国家を持ち上げた二人は、異端派ムスリムであるがゆえに世俗主義的な共和国の理念に忠実とされるアレヴィー派と、国民を等しくトルコ人と見なす共和国の理念のもとで抑圧されてきたクルド系でありながら、軍とクルド非合法武装組織PKKの戦闘ではあえて積極的に軍の側についてた少数派のクルド系であった。彼らはもともとから国家の存在を意識しているところに、外国人である私と向きあうことで、ことさら国家への忠誠を強調したのかもしれない。

●相手との関係の重要性

人々の発言を解釈するとき、彼らがアレヴィー派だからとかクルド系だからだ、ということころまではすぐに思いが至る。だがこのエピソードは、それだけでなく、質問を投げかける私自身が彼らの目にどのように映っているのかを考える必要を示している。

調査者が何者か、何者と見られているかによって、調査する相手へのアプローチが変わり、また相手からの受け容れられ方

もまた変わってくる。このことは必然的に調査で得られる情報にも何かしらの形で反映される。調査者と調査対象者のあいだのこうした関係は、人類学などの分野ではずいぶん前から指摘されてきた。もちろん、テーマや質問の内容によってはあまり意識しなくてよいこともある



イスタンブル市では困窮者にパンのクーポン券を支給している。市内には低所得地域を中心に、随所にこのようなパンの受け取り所が設置されている。(筆者撮影)

だろう。イエス／ノーで答えるアンケート調査のほうがよほど相手の答え方を縛るといふ見方もある。だが自由に語ってもらおうというタイプの調査であるほど、相手は私という存在から自由ではない可能性を疑ってみることが、実は大事なのではないだろうか。